

Network



緩和ケア講演会

「末期がん患者への心のケア」

広島共立病院 副院長 高永甲 文男



沼野 尚美先生

9月29日(土)午後より、標記テーマで安佐地区医師会からも後援を頂いて講演会を開催しました。講師には、宝塚市立病院緩和ケア病棟・チャプレンカウンセラーの沼野尚美先生をお招きしました。がん医療に対する取り組みは重要であり関心も高く、院内外から103名の参加で盛況に行われました。

講演では、末期ガン患者が発する「5つの叫び」(下表)に、私たち医療者がどのように寄り添っていくのか、患者とのコミュニケーションの回り方や心のケア、アプローチの方法など、先生自身が経験された事例も交えながら分かりやすく解説して頂きました。

末期がん患者へのアプローチについて、余命を告げられることへの残酷さを受けとめ、「今日の一日は短かった」と思わせる時間の過ごし方を援助すること、患者は変えることのできない事実を理解してくれる人を待っており、「いつでも言わせる、言わせてあげる」援助を行うこと、「家族との間で上手く生きられなかった」という気持ちに援助するこ



との大切さについて理解を深めました。

「死をめぐる話題」へのアプローチについては考えさせられました。とくに最期の1カ月は、生命への危機感や身体の変化を強く感じるようになり、この期に、患者が一番話したいことが、「死」をめぐる話です。患者から問いかけられる「死」の話題からは決して逃げず話題を終結させないこと、「とにかく一人にはさせない」援助が大切であることを教わりました。最後に、相手が大切な存在であることを、自分の言葉を通して伝えることの大切さについてふれられました。「大切なことは先延ばしにしないこと」「言葉ですぐに伝えること」～さまざまな患者さんとの関わりを通してのお話に、心が豊かになったひとときとなりました。

緩和ケアの充実で、患者のケアも疼痛コントロールも行き届いている現在です。だからこそ、患者には考えたり見つめたりする時間が増えており、その時間・場面で効果的な援助を行うこと、コミュニケーションを図りながら、いざという時の支えになれる準備が大切であることを学びました。2年後に緩和ケア病棟の開設をめざしている当院において、今回の講演は大変貴重な内容となりました。

(参考図書)「いのちと家族の絆ーがん家族のこころの風景」
(沼野尚美著、明石書店 2010年)

末期ガン患者の“5つの叫び”へのアプローチ

- ①残された時間をどう過ごすか～今日の一日は短かった、と思わせる援助を
- ②なぜ私がガンになったのか～いつでも言わせる、言わせてあげられる援助を
- ③心を見つめ過去を振り返るとき～家族との間で上手く生きられなかった、という気持ちに援助を
- ④死の話題を口にしたとき～話題から逃げず終結させない、とにかく一人にはさせない援助を
- ⑤希望を求めるとき～喜びと楽しみを増やす援助を
～患者が待ってくれる、待ってもらえる援助が、医療者の喜びにもつながる